

二拠点居住普及促進のための空間設計手法の研究 —都市と田舎の相互補完によるこれからの住まい方の提案— Study on Spatial Design Method to Promote Multi-Habitation -Proposal for Possible lifestyle through complementing a city with a country-

11523008 鈴木 多珠奈

篠原 聡子教授

平田 京子教授 宮晶子准教授

二拠点居住 相互補完 空間構成要素
Multi-Habitation, Complementarity, Spatial component

1. はじめに

1-1 人の住まい観の変遷

経済の発展とともに、人々は田舎の民家暮らしから都会での団地や一戸建て住宅街での生活を選択した。大勢で暮らし沢山のことをゆるやかに共有していた民家暮らしののち、都市の住まいではプライバシーが求められ、個室や塀を作る空間構成がとられた。

しかし近年、プライバシーを重視する生活が浸透した現在、細分化された小さな空間での閉鎖的な暮らしから、人々は再び緩やかな共有や繋がりを求めるようになってきているのではないだろうか。最近シェアハウスなどが注目されているのもその一環として挙げられるが、さらにこれからの新しい住まい方として、都市の小さな空間だけにとどまらない、過疎化の進む田舎にも目を向ける、二拠点居住に注目する。

現在、二拠点居住は、マルチハビテーションとも呼ばれ、国や行政からも着目されている住まい方であり、興味を持つ人も多くなってきている。しかし、具体的な住まい方の情報は少なく、実際の生活がイメージしづらい現状がある。株式会社日本総合研究所が2006年に行った二拠点居住実践者の実態アンケートによると、普及を妨げる原因としては、地方文化への理解不足、人間関係になじみにくい、不動産物件情報が得にくい、維持費・交通費などのコスト面な

どが挙げられている。

1-2 本研究の目的

本研究は、二拠点居住という住まい方に着目し、二拠点居住が今後普及してゆくにあたり求められる空間構成・空間設計手法の提案を行うことを目的とする。まず、実際の生活空間を図面化し、二拠点居住者の生活実態を把握する。そこから、新規二拠点居住参加者に対して、これからの二拠点居住に必要とされる設計手法について考察し、提案につなげる。

1-3 調査の対象と内容

本研究では千葉県房総半島の南房総地域と首都圏内を行き来する二拠点居住実践者8名を対象として調査を行った。二拠点居住者の生活実態・居住空間を把握することを目的としてヒアリング調査・図面化のための実測調査を行った。ヒアリング調査の内容はソフト面では二拠点居住歴、始めたきっかけ、地域との付き合い方、将来の展望を調査し、ハード面では改修場所や使用状況、気に入っている場所や直したいと思っている場所をヒアリングした。

1-4 既往研究における位置づけ

既往研究では、二拠点居住に関して約79件の論文があることを確認した。ニーズ把握や政策、金銭問題、維持管理に対する研究が多く、特に四国や信州山間部など大都市圏から離れた地域で行う二拠点居住の実態や、自治体の取

り組みと評価分析の研究が多く見られた。

以上より、本研究の目指す大都市圏から身近な里山での暮らし方、アクセスのしやすさも加味された二拠点居住の居住空間分析に関しては、調査途上な分野と考えられる。

1-5 論文の構成

第1章では研究の背景と目的を示し、第2章・第3章で二拠点居住生活実態・使用空間調査結果を示す。第4章で調査結果のまとめと考察を行い、第5章で都市と田舎の2つの家で1つの家の機能を賄う設計提案を行う。

2 二拠点居住実践者の生活実態調査

2-1 ヒアリング調査概要

(1) 調査の対象

千葉県房総半島の南房総地域と首都圏内を往来する二拠点居住実践者を対象とする。二拠点居住者の生活実態把握を目的としてヒアリング調査を行った。今回は房総半島の中でも比較的気候が温暖で過ごしやすと言われていた鋸南町とその近郊で二拠点居住を実践している8組を対象に調査を行った。

(2) 調査方法と内容

調査方法は対象者の自宅または近所で、質問に答えていただく形式で行った。調査の内容はソフト面では二拠点居住歴、きっかけ、将来の展望を調査し、ハード面では改修場所やお気

入りの場所や直したい場所をヒアリングした。

2-2 調査結果

(1) 二拠点居住の生活リズムと将来の展望

二拠点居住生活基本情報と、田舎と都市のそれぞれの家の使用状況を表1に示す。

まず、生活情報面での属性と行き来の頻度の関連は、40代は週末のみ田舎で暮らす場合が4件中3件と多く、年齢が上がるにつれて定年に伴い田舎で過ごす時間が多くなっている。また、表1のFの事例のように田舎に暮らしの重きを置くが東京の一戸建てに高齢の親を残している場合、親の様子を見に都会へ帰るといふ、逆帰省の現象が起こっていることが分かった。将来の展望に注目すると、40代はこれからの田舎での積極的な生活を思い描くが、60代の対象者2件は共に体力が落ちた後の生活を東京に戻って送るか検討する時期となっていた。

(2) 田舎の家の新築・改修比率

田舎の家の新築と改修の比率は、8件中新築が3件、改修が5件となった。コスト面でも優位と見られるほか、気に入った中古住宅に出会った場合は改修をし、こだわりや理想がはつきりしている場合は新築を選択する傾向にある。

(3) 都市の家の偏り・団地と2世帯住宅比率

都市の家においては全8件中、一戸建てで2世帯・3世帯居住をしている場合が3件、団地

表1 ヒアリング調査結果一覧

属性	実施歴	きっかけ	生活情報		新築・改修	田舎の家		都市の家					
			行き来の頻度	今後の展望		使用人数	地域との関わり	場所を選んだきっかけ	一戸建て・集住	将来の使い方			
A	60代・男性	8年目	老後は海の見えるところで過ごしたいから。趣味が釣り。	ほぼ毎日田舎。月に2・3回ほど都市へ	都市の家を賃貸に出す。運転ができなくなったら東京に戻る可能性あり	新築	1人。奥さんがたまに来る。	町内会と地域活動団体に所属	海も見えて山も近く、散歩の場所に適しているから	一戸建て	使用人数合計5人。夫婦・子供2人・ホームステイ	賃貸に出したい。戻る可能性を考えた。売却はしない	
B	50代・夫婦	4年目	田園風景への憧れ。のんびりした老後を求めている	毎週末。金曜夜から月曜夜まで	田舎でずっと過ごして行きたい。体力面の心配はまだしていない。	新築	2人。夫婦。友達も多く遊びに来る	住民票を奥さんにだけ移した。町内会は未加入	道から見えづらく静かに景色を楽しみながら過ごせる場所だから	集合住宅	夫婦	いずれは売却する	
C	50代・男性	3年目	息子が農業移住しその手伝いを済ませたため	毎週末。金曜午後から日曜夜	息子の家の隣に小屋を建てて暮らしたい。	改修	本人と長男の2人	息子が町内会と消防団でその手伝いを時々する	山の上で景色もよく、広い農地もあったから	集合住宅・団地	3人。夫婦と3男	次男と妻が使わなければ、いずれは売却する 子供が使用し、夫婦が居る部屋を1部屋だけ残しておいてほしい	
D	40代・女性	10年目	息子の生き物好きと、よい子育て環境を求めている	毎週末。土曜朝から日曜夜	東京の家は子供にしてみたい。田舎で活性化活動に取り組みたい	改修	5人。夫婦と子供3人	町内会に所属	山の上で景色もよく、広い農地もあったから	一戸建て	7人。2世帯住宅	7人。2世帯住宅	いずれは売却する
E	40代・女性	5年目	古民家好きで、たまたま空き物件を紹介してもらったので	毎週末。金曜夜から日曜夜	早期退職して田舎の家をDIYで改修したい。	改修	2人。姉妹	町内会に所属	古民家愛好会に所属し、見学会に訪れて行き寄せられた気がした	集合住宅・団地	3人。母親と姉妹	いずれは売却する	
F	60代・夫婦	12年目	旦那が田舎暮らしに憧れていたから。趣味は陶芸。	ほぼ毎日田舎。月に2・3回ほど高年齢の親の様子を見に都市へ	体力が続く限りは田舎にいたい。旦那の意向によって都市へ戻る	改修	2人。夫婦。	町内会は未加入だがお祭りの手伝いなどはする	古民家愛好会の雑誌で見つけて内覧に行き、即決して購入した	一戸建て	7人。3世帯住宅	娘と親が使っており部屋を持って余し中。帰る時のために売却はしない	
G	40代・女性	9年目	赴任先の外国から帰国し、家具置き場兼趣味のサーフィン用の拠点を探していたので	毎週末。土曜朝から日曜夜	将来は移住を希望するが、子供の動向によってこれから変化する	新築	3人。夫婦と子供	町内会に所属	最初は田舎に物置用の安アパートを借りたが、タイミングよく土地を見つけたので	集合住宅	3人。夫婦と子供	自分たちが田舎に移住した後も子供が使用することを願っている	
H	40代・男性	4年目	ハワイの雰囲気のある場所に暮らしたい。田舎暮らしは祖母の夢。	家族は主に田舎で過ごし旦那だけ週2日東京	田舎で学んだ環境と共生する建築を都市での建築提案に生かしたい	改修	6人。夫婦と親夫婦、子供2人	町内会と神社の氏子に加入	風景と作りが気に入ったから。良い物件があれば新築を考えていた	集合住宅	元親夫婦の家。旦那と母親が使用	今後子供が東京に行く場合を考えると今後は細々と使用する	

など集合住宅に住んでいる場合が5件となり、どちらの場合も家族で空間をシェアしプライベートスペースのない生活をしていることが分かった。調査で得た二拠点居住を始めるきっかけの理由の他、第二の理由として都市生活の問題が繋がると見ると、集合住宅に住んでいる場合は、部屋の狭さや収納の少なさが田舎の広々とした暮らしを望む理由と考えられ、一戸建てで多世代居住をしている場合は、気負わず時間を過ごすための手段として二拠点居住が使用されていると考えられる。

3 二拠点居住実践者の使用空間・実測調査

3-1 実測調査概要

(1) 調査対象と目的

前述のヒアリング調査と同じ二拠点居住実践者8組を対象とする。二拠点居住者が日々、どのような空間をどのように使用して生活しているのかを明らかにし、今後二拠点居住を実践しようと試みる人が使いやすい空間構成を提案するために、生活空間を図面化する実測調査を行った。その後、図面化した空間を読み込み、今後の設計のヒントとなる空間構成要素を抽出する。

表2 空間構成要素一覧

		二拠点居住においてみられるもの	他の同地域の暮らしにおいてもみられるもの
田舎	ソフト面	留守に耐える配慮 抵抗なくプライベートを開く	近所の人がよく来る 車がないと不便 私的空間がない
	ハード面	景色を楽しむデッキ 外から使用のシャワー 広く開放的な水回り 室内の物干し場	屋根付きの動線 半屋外の作業場 豊富な収納 幅の広い縁側 土足のキッチン
都市	ソフト面	逆帰省 家族間での空間のシェア 常に誰がいる状態 自分だけの空間がない	周りの目がない 交通機関の選択肢
	ハード面	寝泊りできる一部屋 田舎の植物・道具の進出 空き部屋の活用 新規動線の開拓	狭いなりの収納の確保 コンパクトな水回り

(2) 調査内容と方法

実測調査の方法は、実際に居住者と生活している自宅をまわり、実物を確認した上で、改修場所や使いにくいところ、気に入っている場所や今後の増築展開について話を伺った。その後、自宅の図面を所有する方には資料提供をお願いし、図面起こしを行ったが、過半数の対象者は資料提供が難しい状況にあったため、現地で実測を行った。図面を起こす際は現地で撮影した写真とも確認をとり、整合性に配慮した。

3-2 実測調査結果

(1) 都市と田舎の空間構成要素の抽出

実測調査より都市と田舎それぞれの家の空間構成要素を抽出し、表2に示す。この中でも二拠点居住において特徴的な空間構成は以下のものが挙げられる。

■田舎の家のハード面とソフト面 7項目

ハード面では、広く開放的な水回り、景色を楽しむデッキ、外から使用のシャワー、室内の物干し場、日替わりダイニングがあり、ソフト面では、プライベート空間を抵抗感なく開くこと・留守に耐える配慮などが挙げられる。

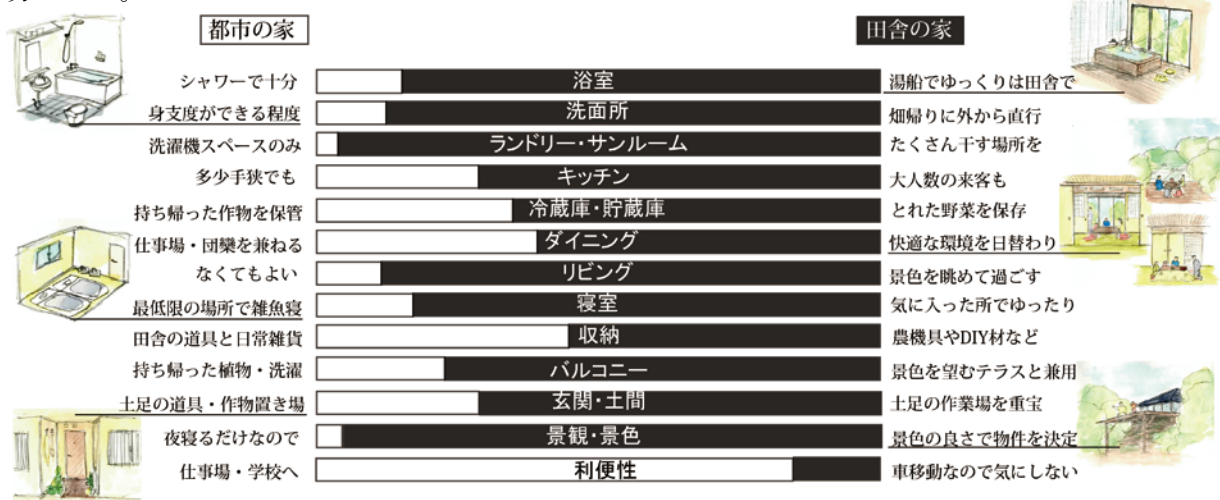
■都市の家のハード面とソフト面 8 項目

都市の家のハード面では、空き部屋の活用、新規動線の開拓、田舎の植物や道具の進出、最低限寝泊りできる一部屋がみられ、ソフト面では、自分だけの空間の未所持、家に常に誰がいる状態、家族間での空間のシェア、逆帰省が見られると思われる。

(2) 二拠点居住にて顕著な特性同士の関連性

二拠点居住において顕著に見られる空間特性には、都市と田舎のそれぞれの要素がお互いに影響を及ぼしている点も多々見つかった。都会で、家族間で小さな空間をシェアする生活をしている二拠点居住者が多く、プライベートを完全に閉じて確保しようと考えている人はあまりいないため、田舎のある意味プライバシーのない濃い人間関係の中でもうまくやっていける性質があることなど、都会での生活環境と田舎での生活環境がリンクしている場合が多く、二拠点居住への適性も垣間見られる。また、二世帯住宅で高齢の親と同居していた夫婦が定年後に田舎に生活の軸を置くようになって、高齢の親が心配で定期的に田舎から東京の実家へ帰るといった逆帰省の現象や、二拠点居住者は平日田舎に来ることができず、長く家を空けることが多いので、次来るまでに雨にぬれず干しておけるサンルームが重宝されていることなどは、二拠点居住のもつ独特の生活リズムから必要とされている習慣や空間であることが分かった。

表 3 都市の家・田舎の家の住宅機能・重視項目比重一覧



4 2つの調査結果のまとめと考察

(1) 都市と田舎の家で差のつく機能重視項目

ヒアリング調査、実測調査をもとにした空間特性の抽出を踏まえて、二拠点居住者が求めている都市の家、田舎の家それぞれの住宅機能、重視項目をまとめた(表3)。特に顕著に特徴が出ている点は、浴室、洗面所、リビング、寝室、景色・景観と利便性があげられる。

■浴室、洗面所

都会の家ではとくにゆっくり時間を過ごす場所でもないの、手軽にシャワーを浴びられ、身支度ができる程度の最低限の設備で構わない一方、田舎の家では景色を見ながらゆっくり湯船につかって疲れをとれるよう、広く長めの良い浴室が求められている。

■リビング

都会の家ではダイニングと完全に兼ねてしまっていて、ダイニングですこし食後などにくつろいだり机で仕事や宿題をする環境があればよいので、リビングは特になくてもよいと考えられているが、田舎の家では友人や近所の人と一緒に大人数でパーティーをしたりお泊り会をしたり、多くの人が集う場として家の中心的役割を果たすものなので、景色の良い場所に広く取りたいと考えられている。

■寝室

都会の家の生活比率にもよるが、田舎の家の比率が高い場合や、都会でも夜短時間眠るだけの

生活になると、最低限の場所で雑魚寝でも構わない場合があり、田舎の家では気に入った暖かい場所でゆっくり眠りたいと考えられている。

■景色・景観と利便性

景色・景観は、田舎の家ではその物件の最大の魅力となり、敷地決定の理由となる大切な検討事項だが、都市の家では仕事から帰ってきた夜しか滞在しないのでこだわらないことが多い。反対に、都市の家で最重視されることは利便性で、駅からのアクセスや最寄り駅の利便性の高さが決め手となる場合も多い。田舎の家は車移動なので、多少のアクセスの不便さは気にしていない。これらを踏まえ、二拠点居住者が使いやすい、今後の生活スタイルの普及を目的とした「2つで1つの家」の提案につなげる。

5 二拠点居住普及促進のための住宅提案

5-1 計画概要・コンセプト

以上の抽出した都市と田舎の空間構成要素・重視項目比重をもとに、暮らし方と空間増殖の変化を含めた設計提案を行う。

コンセプトは、「2つの場所を行き来して使用することで、必要とされる十分な空間構成を賄う建築」とする。都市と田舎の家が合わさり、使用者に十分な1つの家の機能を満たす提案を目指す。都市の家の中で月日が経つとともに必要でなくなる空間を、田舎で展開してゆくことで、本来の家族が所有していた床面積が、2つの地域で豊かな生活となって家族に還元される。生涯で保有する面積を移動させる方法を取り、都市の住まいを、家族の減少に合わせて減築し、必要な分の心地よい空間を作り、田舎の家は1つの小さなコアから増築を重ねて、小さいながら自然を取り込み、豊かな空間を作る。

5-2 計画地概要

(1) 都市の家 板橋区成増

都市の家の計画敷地は、東京都板橋区成増の住宅街にある2世帯住宅の一戸建てとする。成増は東京都板橋区の西端にあり、駅を中心に発

展している。敷地の位置する駅の北口は坂が多く、急な高低差を下ると住宅街につながる。

今回の提案は実際に今使用されている二世帯住宅をモデルに用いて、実測調査を行った後、生活に合わせたリノベーションパターンを提案する。敷地は、住宅街の中にある旗竿敷地で、駅から徒歩約5分の場所にある。

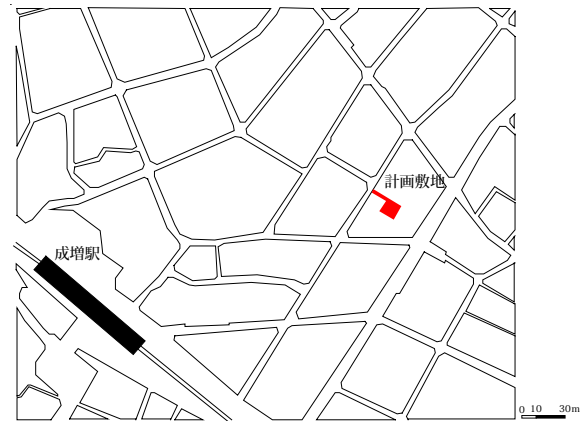


図1 都市の家 広域配置図

(2) 田舎の家 千葉県鋸南町上佐久間

田舎の家の計画敷地は、千葉県鋸南町上佐久間地区とする。千葉県鋸南町は、房総半島の内房地域に位置し、北は富津市、東は鴨川市、南は南房総市、西は東京湾に面している、面積45.16km²の小さな町である。東京都心と町内のインターチェンジとは約1時間の時間距離で結ばれており、都心から行きやすい位置にありながら豊かな自然に恵まれている。また、鋸南町の年間平均気温は17.4℃となっており冬も比較的暖かいことが特徴である。

鋸南町の抱える最大の問題は、人口減少と過疎高齢化である。人口は現在8500人を下回り、2015年の時点で65歳以上が全体の40%を越え、深刻な少子高齢化・過疎化が進みつつある。本提案の敷地は、鋸南町の中でも山側に位置する佐久間地区とし、川沿いの165坪の敷地とする。敷地の隣には小川が流れており、農業用水としても使用できる。敷地の北側には鋸南町が運営している老人福祉施設・銭湯の、笑楽の湯がある。



図 2 田舎の家 広域配置図

5-3 設計提案の生活パターンと変化機会

(1) パターン抽出における2つの要点

二拠点居住者の生活パターンとして、生涯のうち、いつ空間の使い方が変わる時期なのかを検討する。パターンを抽出する際、ヒアリング調査結果を踏まえ、以下の2点に配慮する。

■終の棲家を田舎にするか都市にするか

終の棲家をどこに構えるかという問題は、2拠点居住を始めて何年かたち、健康の心配をする年齢になって考える課題である。しかし、都市の家の使い方や田舎の家の滞在時間と重視する空間などに差が出てくることを考慮し、選択の一例を示すために仮に都市を終の棲家に選んだ場合と田舎の家を終の棲家に選んだ場合を分けてパターン化する。途中で考えが変わる場合も考慮し2つの場合が両立できるように、田舎の家の空間増殖手法において差をつけ、双方に対応できるよう工夫する。

■都市の空き部屋の活用方法

都市の空いた部屋に第三者を入れ、都市の家で利益を得つつ田舎の家の増築費用に充てる。賃貸物件として貸すか、シェアハウスに改修し自分たちもシェアに参加し新しいコミュニティの中で暮らすという2つの選択を提案する。

(2) 4つの対象生活パターンの抽出

今回の提案では、様々な生活パターンの選択肢を提案することで、二拠点居住に取り組みたい人に選択の自由を提供し、生活パターンの検討を行えるようにする。先述の、終の棲家を都市と田舎のどちらで過ごすかという点と、都市の空き部屋の活用方法を踏まえ、本研究では4

つの生活パターンに乗っ取り、時系列で変化する建築の設計提案を行う。

- 1 田舎の家を終の棲家とし都市の家を賃貸に
- 2 田舎の家を終の棲家とし都市の家をシェアハウスに
- 3 都市の家を終の棲家とし都市の家を賃貸に
- 4 都市の家を終の棲家とし都市の家をシェアハウスに

以上の4つの場合に、増築方法や使用方法、都市から移動させる面積の違いなどによって、同じ敷地でも様々に空間が派生してゆく建築を設計する。

(3) 生活の変化による使用空間の変遷機会

以下に、二世帯住宅に住んでいる30代の夫婦が、二拠点居住に取り組むことになった際の典型的な都市の家、田舎の家の生活空間や生活スタイルの変化の変遷と対応を記す。

- | | |
|---|---|
| <p>■都市の家の場合</p> <ul style="list-style-type: none"> ①二拠点居住をはじめ ②子供が独立する ③定年・両親の様子を見に帰る ④両親が亡くなり空き部屋ができる ⑤都市の家を新しく第三者に開放する | <p>■田舎の家の場合</p> <ul style="list-style-type: none"> ①最低限の空間、水回りを整える ②便利な空間を付け加える ③田舎の比重を増やし、都会に稀に帰る ④豊かな空間を付け加える ⑤田舎で過ごすか、都市へ帰るかを検討する以降はそれぞれの生活パターンによる。 |
|---|---|

5-4 増築計画手法と2つの増築方法・構法

(1) コアを中心とした増築の計画手法

本計画では、はじめに最低限の水回りと寝る場所を持ったコアを配置し、その後生活の変化に対応して空間を増築してゆく方法をとる。そのため、増築のきっかけを最初の計画の段階で考慮する。増築の際に最もコストがかかる基礎部分はDIYも難しい段階であるため、今回は増築のきっかけとして基礎を手法に選択する。

(2) DIYが可能な基礎配置と寸法決定

都市の家の面積と同じだけの面積をベタ基礎としてコアの周りに打っておき、そこに立ち上がり部分を設ける。立ち上がり部分は、増築前は机や棚として、増築の際は居住者がDIYで基礎にケミカルアンカーを打ち込み土台を固定して、ホームセンターの材料と自分の技術で室内が完成されるように配慮する。そして居住者自身が自分の手と技術で増築作業を行うこと

ができるよう、基礎の寸法を制限する。居住者が加工に手間取らずに増築作業ができるよう、材の規格に多く用いられる 910 mmの倍数であるとともに、軽トラックに載せて運べる長さの限界として 2730 mmを基準とし配置を工夫する。



図3 基礎立ち上り部分を直売スペースに活用

(3) 基礎の場所と高さとの関係

基礎の立ち上り部分の配置場所と高さの決定方法については、鋸南町の獣害問題を踏まえて計画する。鋸南町では、イノシシとキョンによる畑や民家への獣害に悩まされており、被害を避けるため、鋸南町の畑にはイノシシ除けネットなどが設置されている。二拠点居住者の家は、平日は留守にしており常に人がいない場合が多く、獣害を受けやすいので、基礎で獣害ネットの役割を賄うことを提案する。キョンが飛び越えられる高さは 90 cm、イノシシが飛び越えられる高さは 120 cmのため、立ち上り部分の高さを 120 cmに設定する。すべてを立ち上り基礎で囲むことは閉鎖的になりすぎるため、イノシシネットを併用し、ネットの長さである 3 m以上、基礎同士が離れないように配置することによって、空間の開放性を持ちながらも留守中の家への獣害を防ぐ。また、設置場所は、動物たちの侵入経路の傾向から、森と平地の間・畑の中に重点的に配置する。

(4) 2つの増築手法

田舎の家を終の棲家とする場合と、都市の家を終の棲家にする場合が両立できるように、田舎の家の増築手法を2通り提案し、空間増殖に

て差をつけ、双方に対応できるよう計画する。

■平面的な広がりのある増築手法

1つ目の手法として、田舎の家を終の棲家とする場合には、敷地を広く使い、細長く動線に沿って増築を行ったり、コアの横に空間が付け加えられたり、平面的に広がる増築手法をとる。そのため、一定面積のベタ基礎部分を、なるべく敷地に広がるよう配置し、増築前は畑につづく通路として使用する。また、コア部分の柱のGLから 2700 のところに横架材をまわしておき、屋根や梁を後から簡単にかけられるよう工夫する。横架材は、コアから離れた部分のベタ基礎範囲に別棟を建てた場合は、コアと別棟の間に必要な時だけテント布を張って半屋外空間へと転用できるきっかけとしても機能する。

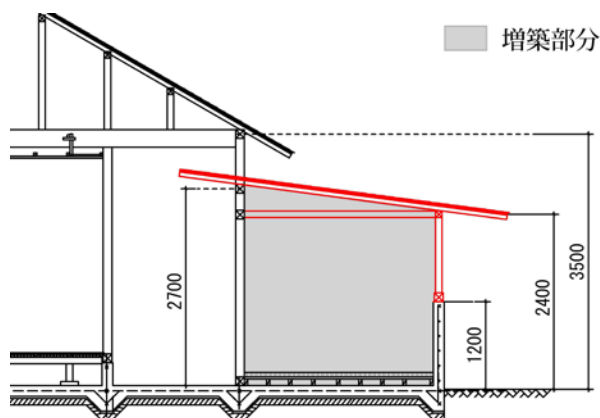


図4 増築部分断面詳細図

■空間を積み上げる増築手法

もう一方の、都市の家を終の棲家とする場合には、コアの中を充実させる増築手法をとる。コアの柱の高さは最も低い外周部で 3500 に設定してあり、先ほどと同じ 2700 の高さに回してある横架材をきっかけにロフトとして使える2階を計画する。コアは寄棟屋根で計画を行うので、天井高はある程度確保できるが、空間の端の天高の低い場所は収納や就寝スペースに活用する。一定面積のベタ基礎部分は、道路から建物へつながる動線部分と、コア周辺にまとめて配置し広いテラスとして使用する。多少の作業道具を入れておく物置などは別に増築

するが、メインの居室はコアの範囲内で納める。

5-5 素材と変化対応

(1) 空間機能に対応した使用素材

構造体は木造とするが、空間の機能、使われ方により外装材に変化をつける。基礎立ち上がり部分と平行な場所は 120 cm を境に下をモルタル、上を機能ごとの外装材でツートンカラーのデザインとし、基礎立ち上がり部分と垂直な場所はガラスと透明波板を使用し視線や風の抜けを考慮する。寝室やリビングなどゆっくり時間を過ごす場所は板張りとし、温かみを重視する。二拠点居住者が重宝する雨に濡れずに洗濯物を干しておけるサンルームは、透明波板とし、日差しを入りやすくする。農機具を収納する作業小屋は、最低限の雨風を防ぎつつコストのかからない、トタン葺きとする。

(2) 年月による変化対応と再利用

田舎の家の増築計画は、仮に 30 代で二拠点居住を始めた場合、定年後や老後までの間に 30 年や 40 年程の長期にわたって行う。初期に建てたコアや小屋の木造部分が痛み、外装の板を取り換えなければならなくなるため、その材を用いてウッドデッキや畑への階段など、外の汚れてもよい場所に転用する。木材の外装材の耐久年数は 10 年といわれており、居住者は DIY を繰り返し家のメンテナンスを担ってゆく。

5-6 4パターンそれぞれの計画詳細

(1) 田舎の家を終の棲家とし都市の家を賃貸に

二世帯住宅に住んでいる夫婦が二拠点居住を始めることを想定し計画する。



図5 都市の家 配置図



図6 田舎の家 配置図



図7 増築前 コア+基礎のみの外部空間



図8 増築中 コア+サンルームと寝室

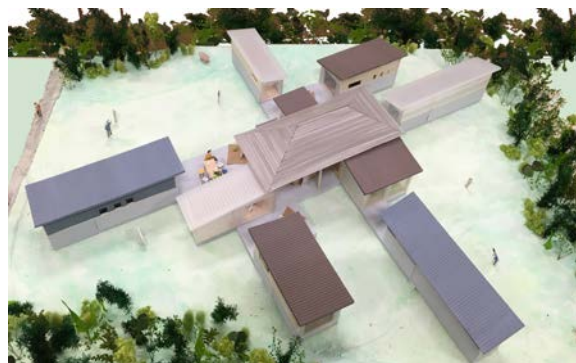


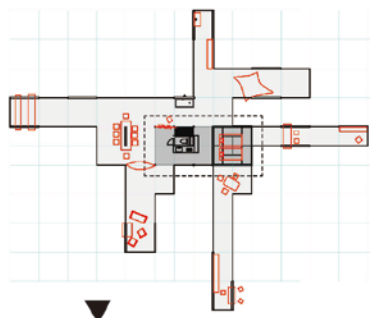
図9 田舎の家増築後 作業小屋や客間を追加

田舎を終の棲家とするパターン+都市の家を賃貸に出す
二世帯住宅にする夫婦が二拠点居住を始める場合

①二拠点居住をはじめ

居住者 夫婦 両親 子供

1階を高齢の両親、
2階を夫婦と子供が使用している。



①最低限の空間、
水回り（コア）を整える

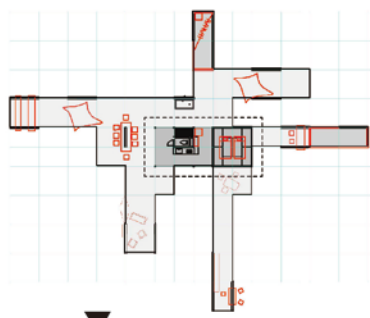
居住者 夫婦 子供

コアの周りには、
都会で所有する面積と同じだけ
土間コンのたたき空間を設ける。

②平日都会、週末田舎暮らし

居住者 夫婦 両親 子供

収納・道具進出場所
土足の植物置き場が必要となり
書斎を土間に変更する。



②必要な空間を付け加える

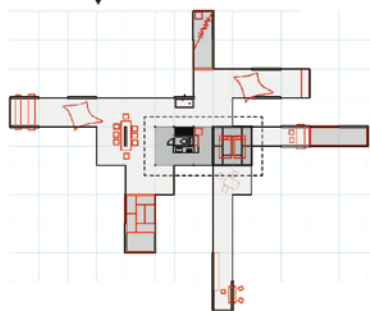
居住者 夫婦 子供

土間部分の面積を室内化し、
サンルームと物置を作る。

③子供が独立する

居住者 夫婦 両親

子供部屋が空いたので両親が
部屋を移り、土間上の部屋の
床を取り払って
吹き抜け空間を作る。



③便利な空間を付け加える

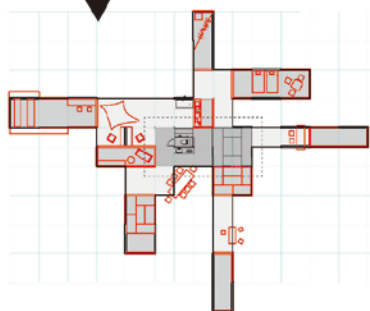
居住者 夫婦

吹き抜け部分の面積を室内化し、
客間を作る。

④定年退職し、時々
両親の様子を見に帰る

居住者 夫婦 両親 賃貸

2階を賃貸物件として貸し、
1階で短期間借りをする。



④豊かな空間を付け加える
田舎の比重を増やし、
都会にたまに帰る。

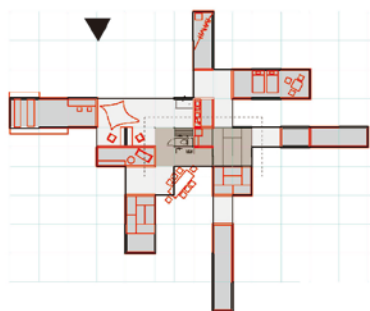
居住者 夫婦

賃貸部分の面積を室内化し、
寝室やリビングを作る。

⑤両親が亡くなり、
空き部屋ができる。

賃貸への提供部分を増やす

居住者 夫婦 賃貸



⑤田舎でのんびりと過ごす

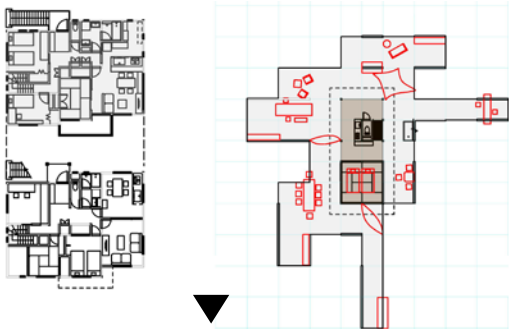
居住者 夫婦

追加の賃貸の面積を室内化し、
和室や収納を充実させる。

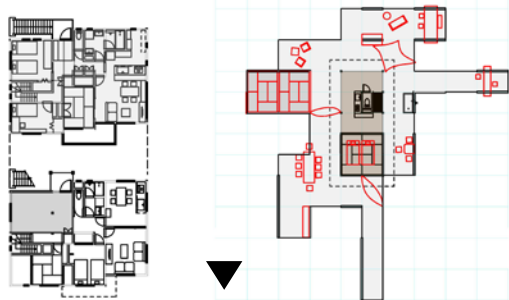
高齢夫婦使用部分 都市・夫婦使用部分 都市・賃貸またはシェア部分 田舎・コア部分
田舎・ベタ基礎部分 田舎・増築室内化部分

(2) 田舎の家を終の棲家とし都市の家をシェアハウスに

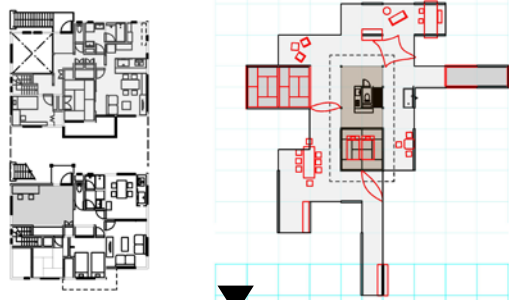
① 二拠点居住を始める



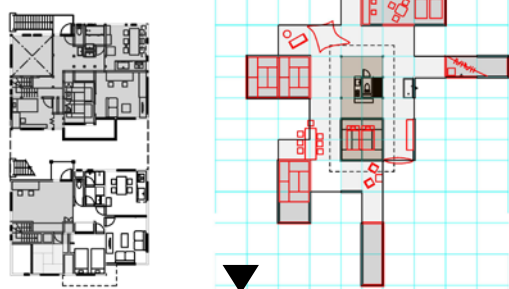
② 書斎を土間にし、土間の面積を客間とする。



③ 子供が独立し、吹き抜けを作る



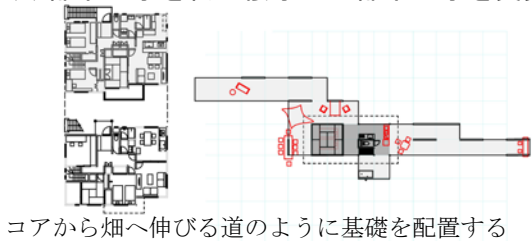
④ 定年後、シェアハウスに改修し新しい交流を楽しむ



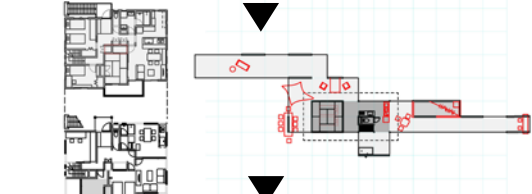
⑤ 1 部屋を残し主に田舎でゆっくりと過ごす



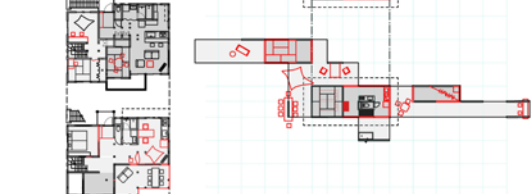
(3) 都市の家を終の棲家とし都市の家を賃貸に



コアから畑へ伸びる道のように基礎を配置する

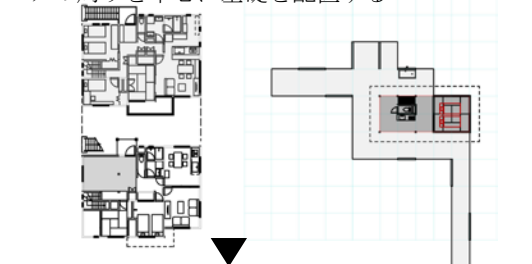


コア上部にロフトを増築

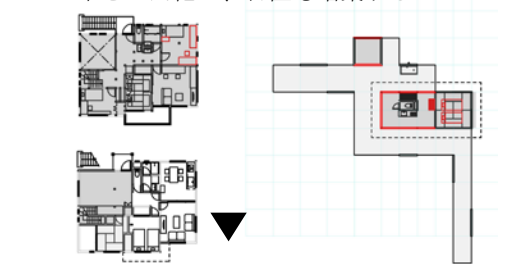


(4) 都市を終の棲家とし、シェアハウスへ改修

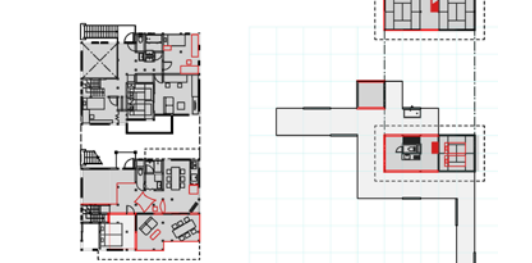
コアの周りを中心に基礎を配置する



コアの中を室内化し、物置も増築する



コアに 2 階のロフトを増築する



主要参考文献 株式会社日本総合研究所「二拠点居住実践者の実態アンケート」2006年10月
「週末は田舎暮らし ゼロからはじめた二拠点居住奮闘記」馬場未織著 2014年2月 ダイヤモンド社